
博士の珍発明 新入れ替えカメラ

青宮 友

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

博士の珍発明 新入れ替えカメラ

【NZコード】

N9304Y

【作者名】

青宮 友

【あらすじ】

博士に突然呼び出された新一、蘭、平次、和葉。それはハチャメチャな一週間の始まりだった。

プロローグ

「おー！ 富野！ 聞いてんのか！」

「俺ら大変な事になつたんだぞー。ちよつとへりこ返事したりど
うなんやー。」

「……」

「……」

「ねえ、志保ちゃんならなんとかできない？」

「長い事研究者やつとつたんやう？ 何とか出来ひんの？」

「……」

「おい！ 高野ー！」

「志保ちゃんー！」

「……取り敢えず落ち着いてくれない？ 蘭さんが乱暴な関西弁使
つたり和葉さんが標準語で男言葉、……それに男集団は女言葉、…… 気
絶しそうだわ……」

何を言つてゐるんだ。そんな事有り得ない、志保は夢でも見てい
るんじやないかと、思つた人も多い事だらう。
しかしその言葉に間違いなどない。紛れもない事実なのだ。

では何故このような奇妙な状態になつてゐるのか。説明するには
一時間程前に遡らなければならぬ。

「まだ準備出来ないのかよ博士……」

「まあ待つてくれんかの、世紀の発明品には長い準備も必要なんじや」

「ホンマ早よしてくれんか？ 見なくてもええやつを見るためにわざわざ帰りの新幹線遅らせて来とるんやから……」

「……ってゆうとむ自分が一番興味示しどった癖に……」

夏の長期休暇を利用して、またも東京に遊びに来た平次と和葉。一日間過ごし、帰ろうと思つた矢先に一本の電話が鳴つた。

「遂に世紀の発明が完成した！ すぐに見に来てくれるか？」

そんな主旨の博士からの電話に平次が興味を示し、予約してあつた新幹線の席をキャンセルし、阿笠邸に足を運んだのだ。

(つたく……服部は知らねえだろうけど博士の発明品は八割方ろくでもねえ失敗作なんだぜ？ 蘭も言つてたけど何か起こつてもしらねえからな……)

「……よし、これでいいじゃらう！」

嘆く新一とは裏腹に準備を終えた博士は得意げな笑みを浮かべ、声を発した。

「コホン、ではお披露目しよう……これが世紀の大発明……」

大きな物体を覆っていた赤い布が博士の手によつて外されていく。

「入れ替えカメラ、チエング^{じー}じゃー。」

「これが発明品のカメラ……かいな？」

「ああ、そうじゃ。」

平次が訊くのも仕方ない。布の下に隠されていたものは見た目真っ黒のペンキで塗られただけの大きな箱だったのだから。

「……これが世紀の大発明やと思ひ、蘭ちゃん？」

「……ううん……」

「……やよね？」

首を横に振り遠慮がちに否定する蘭、そして和葉も同じ感想をもつたらしく。

「そう見えるかの？ まあ、これから起る現象を見ればたまげるじゃねーの……」

そう言いつと博士は裏側のボタンを押した。

「さやー！」

「まぶしきー！」

女性組は突然の閃光に驚き黄色い声を上げる。

「……もうこいじやうつ、そろそろ自分の体を見てみ……」

その瞬間部屋には耳の破裂しそうな爆音が響いた。

機械が爆発したのだ。

次々起じる閃光と連鎖する爆発にそれぞれアクションを起す。

冷静に頭を隠し女性の名を呼ぶ

蘭、和葉。

落ち着きを失い悲鳴を挙げる

新一、平次。

気を失う博士……

異変は既に始まっていた。

「…………おい蘭、大丈夫か？」

傍にいた蘭を見つけ声をかける和葉。

「…………この声、和葉やな？ 別に大丈夫やけど……俺は毛利の姉ちゃんちやつ……え？」

「おいボケてんのか？ 俺は和葉ちゃんじゃ……つー なんだこの声！」

「見た目」 蘭と和葉は混乱しつつも自らの体を何かを探るように触り出した。そしてこれ以上ない驚いた表情、大きな声で叫んだ。

「俺が和葉ちゃん！？」

「俺が毛利の姉ちゃんになつとる！？」

「……うーん、爆発収まつたのかな?……新一(ビ)にいるの?……」
目覚めた「見た目」新一は目の前でパニッシュになっている蘭と和葉をみて言葉を失う。

「……私?」

「もう安全やな、平次大丈夫やつ……た……」

「見た目」平次も自らの目を疑うような素振りをみせる。

「……アタシがなんで目の前に?」

目の前で意味不明なことを話す「自分たち」を見て漸く状況を理解した「見た目」蘭と和葉。そして未だ理解していないらしい目の前の二人に話した。

「聞いてくれ……ふたりは蘭、そして和葉ちゃんなんだろ? 信じられないだろうが俺は和葉ちゃんの姿をしているけど本当は工藤新一だ……自分の姿を見てみろ。口調からすると蘭は俺に、和葉ちゃんは服部になつていいはずだ……」

二人はまさかと思つたらしいが、目の前にいるのは紛れもなく自分たち。取り敢えず自分の姿を確認した。

この体、まさか……

「私が新一!?」

「アタシが平次!?」

阿笠邸に本日二度目の大声が響いた。

「俺たちはランダムで姿を入れ替わつてしまつたんだよ!…」

新一の言葉でまたも起つる悲鳴。それはこれから始まる波瀾万丈の日々の始まりだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9304y/>

博士の珍発明 新入れ替えカメラ

2011年11月27日21時51分発行